

1

(1・3・6 各完答)

1 I ア
II ウ
2 ウ

3 I 弟
II 白
っ
ぽい
4 エ
5 不安

6 X イ
Y エ
7 (記述題)
8 ター
ター
一家

9 イ
10 ブ
ル
ド
ー
ザ
ー

11 a 整地
b 積
んで
c 感心

d 調達

2

1 a 用語
b 念頭
c 刷新

2 し
で
か
し
3 I 自分
が

3 II よ
し
あ
III 「自立
IV 依存
し
4 2

5 ア
6 エ
7 イ
8 イ
9 もう
自
分
で

1

7
川は、ター
タに、
つねにそ
を
見守っ
感
を
与え
在
だ
っ
た
と
い
う
こ
と
。 成
長
つ
て

(同意可)

配点	
11	21 各2点× 7 = 14点
1	7 6点
その他	各4点× 20 = 80点
100点	

- 1 文章中に出てきた言葉は、ぜひとも意味や使い方を確認する習慣をつけてほしい。
- 2 ②の直前には「人がひっきりなしに」とあるので、「行ったり来たり」というような内容が入るだろうと見当をつける。「右往左往」は文字通りには「右へ行ったり、左へ行ったり」ということである。「往復」などが参考になる。
- 3 登場人物（といってもネズミだが）については、通読時から整理しておくつもりで読み進めてほしい。タータとチッチは兄弟で、タータが兄、チッチが弟である。前半部分でも幼さが感じられる書き方がされているのでなんとなくはわかるだろうが、後半に進めば「巣穴で待つ赤ん坊のチッチに」という表現も見つかる。Ⅱは◎の文に「母親と同じく」というヒントがあるので易しいはずである。
- 4 「踏み潰されたらどうする」や「すぐ見つかる危険がある」というのに……といった発言から、お父さんはチッチのことを心配していることが読み取れる。
- 5 「きつとお父さん」という直前部分に注目する。もちろん、ここでは「チッチと同じように」という意味合いが込められているはずである。チッチもたんなる好奇心だけで作業現場に近づいているわけではなく、タータの発言によれば「チッチも不安で、居ても立ってもいられないんだよ」とある。
- 6 ≪ X ≫は、暖かい様子を表す言葉、≪ Y ≫は増水した川の流れの響きでくぐもった轟きであるはずである。もちろん、「ねっとり」のようにややマイナスのニュアンスが強い言葉を≪ X ≫に選んだりしてはいけない。
- 7 たとえをほどく設問である。こういった設問に食らいついてくることが、これから小6になる生徒には求められる。ここでは川の様子の中で、「母親」にたとえられる部分を汲み取っていく。直前に「優しいお母さんは」という実母についての表現もあるので、「優しさ」が感じられる要素を盛り込んでいくことになるだろう。もちろん、「時に怖いことがある」ということが含まれていてもよいだろう。
- 8 「彼」↓「その子どもたち」↓「孫たち」という流れの三文をまとめることが要求されているから、この部分をまとめた「何世代かかけて」と対応させる。それ以外の具体的な巣穴の拡張作業も、「居心地のよい住まいを作り上げた」とすれば抽象化してまとめきったといえるだろう。
- 9 まっさきに確認してほしいのはやはり直前部分である。この部分を「自由」という言葉でまとめられることに納得できるかが重要であった。
- 10 「朝早くから」が冒頭の「早朝から」と同じであることに気づくとよい。川の音をかき消してしまうものを探すということでも見つけるだろう。
- 11 a「整地」は同音異義語に注意してほしい。「生地」・「聖地」など、小学校で習う字で書けるものも多いので、しっかり使い分けよう。b「積」はいとへの別字と混同しないように。c「感心」は、同音異義語との区別が必須である。頻出なので必ず書き分けてほしい。d「調達」は、「達」の字形に注意。よこぼうの本数などに間違いが散見する。
- 2
- 1 a「用語」という言葉の使い方慣れておこう。b「念頭」は、「念」の上部を「令」のように書かないように注意してほしい。c「刷新」は「新しくすること」。言葉を知っていれば易しいが、知らなければ想像がつきにくいかもしれない。
- 2 「しでかす」は「してしまう」という言い方からは、この続きの部分のほうが重要だと判断してよいだろう。
- 3 本文の第二段落・第三段落がそれぞれ「前者（二つ目）」の立場、「後者（二つ目）」の立場を段落ごとにまとめて書いている。難解な文章ほど、段落をひとまとまりととらえて着実に読み進めることを意識してほしい。また、——線②の直前の段落に、それに対する反論が書かれている。ここは反論をまとめた段落になっており、その中に「前者については」・「後者についても」と並べて書かれている。それぞれの部分から対応する箇所を探せば、闇雲に探さなくても答えはすぐそこにある。
- 4 「自分を出発点として自立し、文脈のなかで生きながらも、ものごとのよしあしを自分で判定する」という表現はどちらよりだろうか。「文脈のなかで生きながらも」という言い方からは、この続きの部分のほうが重要だと判断してよいだろう。
- 5 段落冒頭の問いかけに対し、不十分な答えを示しながら、それを否定して、よりよい答えを示す流れの中に④がでてくる。つまり、「イマイチな答え」と「よりよい答え」を比べた言い方だということと言えるだろう。そこから「むしろ」が浮かび上がる。もうひとつの箇所は「いや、実際いるでしょう」↓④↓「どんな大人にも」と続くので、やはりこちらもよりよい言い方を導き出す表現であることがわかる。
- 6 直前の部分を受けて、そのときの気持ちをたどって見た表現である。「人間社会に通用している」価値観を学んできたのだが、「それを一時なりとも離れ」てみたとき、どのような感じがするか、ということである。「生きる手がかりを見失って」という表現や、「これは恐ろしいことではないでしょうか」と続くデカルトの箇所にも書かれていることを参考にするとよいだろう。
- 7 デカルトの言葉として非常に有名なもので、知っているとしてもそれだけでもできる。ただ、ここではそのことを必ずしも前提としていくわけではなく、直前の「すべてを疑うことで、かえって、疑っているかぎり、疑っている私がいる」をまとめた表現を選べばよい。「思う」という穏当な表現になっているところが若干「疑う」のニュアンスと遠く感じられるかもしれないが、いろいろなことを思い、考えていくことで、多くのことは疑いが生じて、その疑いが生じた自分は確としてある、ということであろう。
- 8 「あてはまらないもの」を選ぶことに注意。直前と照らし合わせていけば容易な設問なので、手早く処理したいところである。いかにも一般論として正しそうな答えにひっかからないようにしてほしい。
- 9 「ここより後の本文中から」という指定を見落とさず、時間を浪費しないようにしよう。ここまで述べられていたように、「自分で考える」のは、日常の生活の基盤を見失う可能性のある困難なことなのであった。しかし、それでも、「自分で考える勇気をもって」、「勇気がなくて考え始められないのは、当人の責任だ」というのである。「というのです」という引用の形も、カントの意見を代弁しているということの目印であるので、チェックしてほしい。